

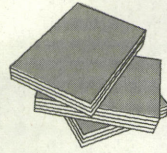
## 「子どもとの友」への対話

首藤美香子

手元にある昭和四十七年発行の古い国語辞典によれば、「いきいきしさ」とは、「(形容詞『いきいきしい』の語幹に接尾語『さ』の付いたもの) 活気や生気にみちていること。また、その度合<sup>注1</sup>」の意とされている。

倉橋が『幼児の教育』の巻頭言で、「いきいきしさ」をキーワードに子どもの傍<sup>そば</sup>にある人に厳しい戒めを説いたのは、一九三四(昭和九)年である。この年は、『幼稚園保育法真諦』と『日本幼稚園史』が相次いで出版された歴史的な年にあたる。

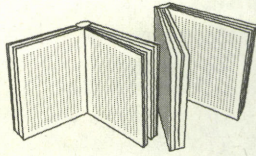
一八七六(明治九)年に東京女子師範学校附属幼稚園が開園して以来、各地で幼稚園が普及したが、半世紀を経た節目の一九二六(大正十五)年には、「幼稚園令」が制定される。この幼稚園に関する独立した勅令の公布に尽力した倉橋がさらに、幼稚園保育法の本質をとらえた極致であると自負する『幼稚園保育法真諦』の構想を世に示したのは、大塚にある現園舎に移転した昭和七年の翌夏に行った、日本幼稚園協会の講習会である。『幼稚園保育法真諦』の序で倉橋は、「フレールベルの精神を



忘れて、その方法の末のみを伝統化した幼稚園を疑う。定型と機械化とによって幼児のいきいきしさを奪う幼稚園を慨く。幼児を無理に自分の方へ捕えて幼児の方へ赴き即こうとするこまやかさのない幼稚園を忌む。つまりは、幼児を教育すると称して幼児を先ず生活させることをしない幼稚園に反対する(傍線 引用者<sup>注2</sup>)と、従来の幼稚園型を破ることを宣言する。幼稚園は幼児の「いきいきしさ」を奪うべきではないという倉橋の強い問題意識が、「幼児が幼児として生活させられる幼稚園の実現」を志す保育法創案の原点にある。

「いきいきしさ」という生命力あふれる人間の生の姿を謳歌する姿勢は、幼稚園教育の祖であるフレーベルにも見られる。力いっぱい、熱心に、自発的に、黙々と、忍耐強く、身体が疲れるまで根気よく遊びに没頭し、「神性」を身に体する子どもの姿に価値を置き教育の中心に据えたフレーベルだが、倉橋と大きく異なるのは、フレーベルが子どもを「社会改革のファクター」として、また「大人自身の生」を「革新」させる存在ととらえようとした点<sup>注3</sup>であろう。

倉橋の説く「いきいきしさ」には、みじんの甘えもあいまいさも幻想も許されないう、子どもと向き合う厳しい覚悟が見えてこよう。そこには、「できれば教師自身<sup>注4</sup>が子どもであれば、生徒の友だちになって一緒に遊びながら信頼をうることでできると、よい教師の資格とは「子どもの友」であるとしたルソーからは、大きく隔たつて見える。



津守真は、理想の保育者像に「かかわるときには、自分も生命的になり、相手の生命性をも生かす」を挙げるが、継続する日常生活の中では、理想とする保育的かわりもじきに停滞しがちで、「人は常に生命的になってはいられない。身体的にも精神的にも疲労する」と率直に認める。しかし、今日の保育者の「いきいきしさ」を奪うものは、身体的精神的な疲労だけではなく、就学前教育の混迷や、目まぐるしく変わる社会のスピードに子どもも大人も翻弄され、「生活を成り立たせること」の難しさに心が萎え、「鈍くあること」でしか自己防衛できないのも、理由にあるかもしれない。

(白梅学園大学子ども学部准教授)

注(引用文献)

- 1 『日本国語大辞典』第一巻 小学館 一九七二(昭和四十七)年 p.657
- 2 倉橋惣三「幼稚園保育法真諦」東洋図書 一九三四年  
〔幼稚園真諦〕フレール館 一九五三年 序より引用)
- 3 矢野智司『子どもという思想』玉川大学出版部 一九九五年 p.95-99
- 4 ルソー『エミール(上)』今野一雄訳 岩波文庫 一九六二年 p.50
- 5 津守真「保育者としての教師」佐伯胖ほか編集『岩波講座 現代の教育―危機と改革―第六巻 教師像の再構築』岩波書店 一九九八年 p.147-148